

---

# 貧乏性な魔法使い

上水電機

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

貧乏性な魔法使い

### 【Zコード】

Z2274BA

### 【作者名】

上水電機

### 【あらすじ】

せつかくエリートコースに乗れたのに、貧乏性な性格から損ばかり。そんな魔法使いの日常生活。

## 入学させられたのだ。

学業に追われる毎日がやつと終わり、静かな毎日が戻ってきた。

13歳で入学命令書が届き、全寮制の魔術師の学校に強制入学させられたのだ。本来、此の手の学校は、貴族や戦闘魔術を使う軍の名家に魔術医など血筋が通る人達の学校だつた。命令書が届き、お袋は慌てて役所に出かけて、入学を断りに行つたが、断られた。「魔術師は国家財産です。理解出来ない事が有るならココにお書き下さい。」家はパン屋で莫大な入学金が払えない。お袋が、暗い顔を悟つてか、役所の職員が詳しい話しを聞いてあげるので、後日来なさいと言つてくれた。お袋は字が余り読めなかつたのだ。親父もそうだ。教会の神父が子供達を集めて教える所しか行つた事なかつた。僕だけが小学校に辛うじて通つた程度。友達で字が読めない奴がごまんといた。

後日、役人が迎えに来て、俺とお袋を馬車に乗せると、セントラルパーク前にある中央議会省に連れて行かれた。馬車にソファーがあるのに驚いた。乗合の馬車にしか乗つた事が無かつたので、思わずハンカチーフを擦いてお袋と座つた。「簡単に説明しきりますよゾーレッツさん。実は出生届のミハイル君の手形から魔力の反応が出来てね、魔術師は国家財産です。この国にほんの少ししかいません。これは体を鍛えれば成れるとか、貴族だから、とか関係ないのです。血筋は大いに関係するようですが、随分昔の力が出てきたとも考えられます。」役人がポットに入つた紅茶を勧めた。「学校に必要なものは全て国が揃える用意が有ります。」

議会省でも同じく説明を受けた。必要書類にサインをし、封印の刻印が押された。「おめでとう。ミハイル君に少し適正の検査が残つてるので、来て下さい。お母さんお茶はいかがですか?此処で少しあ待ち頂きます。」役人が僕を別の部屋に案内した。「上着を取り、楽にしてくれ。いまから適正の検査が始まる。痛くないさ。

ただ、水晶玉を見るだけだ。」ほどなく老人が登場し震える手で水晶玉を撫で始めた。思わず大丈夫?と言つてしまいそうな危なつかしい手つきだ。「あんたの生まれる前からやつてるよ坊や。大丈夫。」半分、自分に言い聞かせているかの様に呟く。「頭を空っぽにしておくれ。」何か覗かれる感じがして程なく終わつた。「何も特別な事は無いさ。坊やの器と色を見せてもらつたんだよ。器は魔力の量。色は適正だよ。」「どんな色?」思わず聞いてみたが、老婆はワインクすると、退席を促した。「書類が届けば、全て判る。先入観は阻害にしかなら無い。しつかり学びなされ。」お袋とまた馬車に乗り、家路についた。

ダウンタウンに有る我が家では、ちょっとしたお祭り騒ぎになつていた。知り合いに偉い人物が出るのだ。しかも、将来を約束され。長屋の大家なんか娘に一番いい服を着せて連れて来ている。普段家賃の催促にしかこないので。

一ヶ月ほど準備期間があつた。僕の周りの変化に戸惑い驚きの連発だつた。パン屋に来る客が変わつた。若い娘さんが増えた。多分親が行つて来いとけしかけているに違いない。モテるのは嬉しいが、自分の後ろしかみていらない様で、複雑な気持ちだつた。大家の娘と婚約騒ぎには多いに驚いた。教会の熱心な信者なんかは、今でも許婚制度なんか守つていたから。でも13歳だ。少し早すぎるよね。大家の事、将来の稼ぎに目が眩んで娘まで売りに出したと噂が飛んでいた。やれやれだ、子供ながら疲れちゃう。

## 卒業までの流れ

学校は本当に凄かつた。まずはクラス分けで、僕の学科は魔法薬学。要は、魔法で効き目が増幅されている又は魔法によつて作られる薬を作る魔法使いのクラスだ。力を貯めて放出する戦闘魔術や剣術使いなどと違う地味なもんだ。魔力の量とかの関係でなく、蛇口が太いか細いかの違いらしい。医者に次ぐ高貴な地位なのだが、花がない。男なら軍服と金のモールだつた。しかも、学年30人で、男僕含めて5人しかいない。その後金の力か、皆さん戦闘魔術クラスに転出あそばれました。悲しいかな貧乏人の僕だけ女のコしか居ない教室で頑張る羽目になつた。

学校からは補助金が出ていた。僕みたいな平民（貧民街の出）などに教材費として金貨が支給されていた。基本的な持ち物は支給される。要は贅沢なお金だ。流石に箒などは買つたが我慢できるものは我慢した。その分、親に仕送りして家賃の足しにしてもらつた。多分家賃の支払いしてもお釣りが来ると思けど。少し多い親孝行と思う事にした。

学校三年生の時に始めて彼女が出来た。それがまた金持ちで、多分今思うと遊び人だつたと思う。半年間お付き合いしたが、振り回されて疲れてしまつた。やつぱり身分相応て有るんだと考え方された。

優秀な成績でもなかつたが、落第もせずにいよいよ卒業となつた。その後の進路は院生になり新たな研究室に入るか、軍の病院に入るか、家の家業が魔法医か。最後は国の命令書が届き、地方での勤務（5年契約）だつた。軍服は憧れたが、自由度が無い。新米は直ぐに駆り出される、との理由で却下。研究室は怪しい連中が多いし、派閥やらで大変との先輩談で却下。地方での勤務は5年すれば自分の故郷に戻れるし、何よりも自由度が高い。親父なんかは、堅い軍の仕事と言つてはいたが、そんなにライバル居ないから大丈夫と説得

した。

いよいよ卒業となつた時、国の命令書が届き、少し遠い街での勤務が決まつた。授業でしか聞いたこと無い様な名前の所だつた。この国は中央議会が有り地方からは代表者が来て政治が行われる。地方はこの代表者が地方議会を召集し政治を取り行う。命令書にはこの代表者に面会して指示を受ける事。施設、資金に関しては地方議会より支給される。と言つていた。2週間後とまで書いてある。僕の筈では3日、船と陸路では5日掛かるので、休みは短かくなつてしまつ。やれやれだ、やる事が山ほどある。少し遠い目になりながら、実家に帰る準備を急いだ。

「よいよ出発の朝を迎えた。お袋は寂しそうにしていたが、親父なんかは知らん顔で朝早くからパンを焼いていた。「じゃ、行つて来る。住む所決まつたら知らせる」僕が行こうとした時に、パンの入つたバスケットを渡された。「途中で食え。」また直ぐに釜に向かつてしまつた。「ありがとう」「僕はそれだけ答えると、荷物を出す為に入り口に向かつた。

軍の馬車は定刻どおりにやつて來た。僕と余り歳が変わらなそうな兵卒と荷物を積み込んだ。トランク3個、薬草ケース2個。トランクには魔法書と実験機材が詰め込まれて重そうだつた。泣くお袋をなだめ定期船のいる港に向かつ。朝の道は混んでいたが、軍用馬車とあつて道を譲つてもらえた。「君の身分証、魔法薬医のものだよね。」フラスコと天秤のロゴのペンダントを見ながら兵が話しかけて來た。「ウン、新米だけどね、今から5年の武者修行さ」「僕はビリーだ宜しく」「ミハエルだ宜しく」ビリーは少し考えてから話出した。「な、調薬費高いのか?ウワサで普通の薬の10倍ぐらいいするつて聞いたけど」尊は本當だし、庶民からしたら最後に頼る薬だつた。時間と手間が掛かる。物によつて特殊なハーブがいるなどイロイロ理由があつた。「患者さん」といふことに配合が違うし、手間が掛かる。尊は本當だよ」僕の答えを聞いたビリーは少しため息をついた。「家の婆さん膝がイタくて歩けないんじやな」「そうだね。」思わず聞いたんだけど、直ぐに出来ないんじやな」「そうだね。」

二人で溜息を吐いたが、フツと思い出した。隣の爺さんに泣きつかられてクリームとシロップを作つた事があつた。3日ほどで痛みが少なくなり、少しだが歩ける様になつた。あの薬なら赴任先の挨拶がわりにと少し多めに作つてある。「少しだが有るよ。魔法薬分けられるとと思うよ。」港に着いてからトランクの中身をかき回し、小瓶とクリームの包を出した。「合づ、合わないが有るからクリームか

ら試して。痛みが少なくなり、調子が良い時にシロップを少しづつ使ってくれ。」うつすらと発光する小瓶を眺めながらビリーが頷いた。「俺あんましお金無いんだ。代わりにコレでどう? 護身用に兵器庫から持つて来たんだが。」ピストルと火薬入と丸い鉛の玉だつた。「兵器庫にしりあいが居るから廃棄扱いにして貰うさ。気にしないで持つて行つてくれ。」僕は喜んだ。なんせ、剣やダガーすら持つていなかつたのだ。僕はピストルをベルトに差し込み、ビリーと定期船にトランクをはこんだ。

定期船は三本のマストがある貨物船だつた。後ろの方に1等船室その下に2等船室があつた。僕は余り旅費を掛けたく無くて、1等船室にした。旅費は事前にもらつていたが、節約して残しておくのは自由だ。6人部屋に入ると、先客が居た。若い女性と太つてきつい顔のおばさんだつた。案内してくれた水夫が「奴隸商人さ。生憎部屋が満員御礼でね、あのババア奴隸9人も連れていのに5人分しか払わないんだ。言いぐさがベッド5台しか使わないから! だと、頭イかれてる」「でもなんで、僕が同じ部屋なんだ? おかしいだろう?」水夫が大きく溜息を吐いた。「仕方ないだろ。いい歳のおっさんより角が立たないだろ。それに目の保養に成ると思えば、安い位さ」これ以上掛けあつても得る物なし! 仕方なく部屋に戻る。念のためペンドントを胸のポケットに隠した。おお! ピストルの点検も。備えあれば憂いなし。恐る恐るドアを開け中に入つた。自分のロッカーを開け中に上着を入れ、貴重品を入れてから魔法でロックした。やれやれコレで一安心。着替どうする? シャツだけで我慢するか。ベットは? と思い見ると、何と全部占領されていた。「ここ、僕のベット何だけど、退いて貰えないかい?」ベットにいた若い女はキヨトンとオバさんの方を見ている。「ナンダイ! 若い女性が寝ているんじや無いか! 黙つて譲つてやるのが紳士じやないか! 坊や女の口に床で寝ろてか! 世も末だね!」オバさんの目に勝ち誇つた光があつた。クソ先手を打たれた。僕は少し考えてから「この女人もベットの一部なんでしょ。僕はこのナンバーのお金を支払つて

ここに来た。「コレは僕のものだ。それともチケット見せて貰つてもいいのかな?」丁度さつきの水夫が顔を出した。「丁度良かつた。僕のベット何だけど、白いシーツと女の口付きかい?」水夫が少し考えてから、「ああ、あのベットはあんたに貸した。その上のシーツと女の口もだ。船じゃ5人分のベットしか女たちにかして無い。」水夫はそれだけ答えるとニヤリとした。オバさん舌打ちすると、何か違う言葉で女の口に話すと、ベットから出て行つた。やれやれコレで一安心。定期船はその日の午後引き潮に乗り出発した。5日の辛抱だ。ベット横たわり揺らいでいるうちに寝てしまった。

## 船は辛いよね？

朝からバタバタと音がして目が覚めた。窓から入つて来る風が冷たい。ほぼ北に進んでいるので、これからどんどん寒くなるだろう。春になつたばかりだし、仕方ないか。ノックする音がして、朝食とコーヒーが運ばれて来た。塩漬の豚に固すぎるパンだつた。腐らな様にしているのは分かるが、もう少しなんとかならない物かな。塩っぱい肉を家から持つて来たパンに挟んで食べた。とても堅いパンは食べれそうにない、部屋の人達もパンをコーヒーに浸したり薄く切ろうとしたが、無駄な努力だつた。例のオバさんがジロリと睨んでいるので、急いで食べるどテッキに出て行つた。船室よりテッキでお日様に当たつていた方が暖かく心地よい。見渡すと軍服姿の若い士官がいる。でも魔法使いには見えないな、魔法の匂いがしない。もしかしたら消しているのか敵軍に悟られない為に訓練があると聞いた事がある。悲しいかな医者や薬医には要らない訓練だ。僕がぼんやり見て居るとパツと振り返り目が会つた。ヤバい！大体はこの後絡まれる。僕は目をそらして逃げ様とした時に声を掛けられた。「君、チヨット！」海を眺めるふりをして、聞こえてないよ的にしていたが、前に立たれた。「君、魔法使いだろ？」「金髪、ガラスの様な瞳、絵に書いた様。僕はボサボサの頭を搔きながら「何の事ですかね？」とトボけた。だつて面倒臭そうなんだけど。「嘘は通じない。君から魔力が感じる。」眞面目な優等生だつたのだろうな。「で？」思わず言つてしまつた。「君、どこまで行くんだ？」まるで担任の先生の様な威圧感。早く逃げなければ。ダウンタウンで鍛えた危機管理アラームが鳴つている。「ノルデンまで。」「そう。僕もそうだ。僕の故郷だ。でもその身なりはなんだ？制服有るだろ？」「確かに、くたびれた軍用コート親父のお下がりのシャツズボン古着屋で買ったブーツ。綺麗には見えないな。「僕は軍人さんじや無いんで、支給されない。ただの薬屋さ。しかも、親はパン

屋さ。「彼は黙っていた。少しの沈黙の後、「この船のオーナーは僕の親戚だ。上流階級と会うのに、剣ぐらい下げていないと笑われる。」彼は黙つて着いてこいと合図すると、船倉に降りて行った。部屋からカトトラスを下げて来ると僕に押し付けた。「コレは短かく使いやすい。稽古はノルデンに着いたら、ミッチリ付けてやる。」僕は頷き礼を言いながら、部屋に戻った。その日一日中本を読んで過ごした。またあの士官に捕まつてジロジロ見られるのも癪に触る。静かにしているのが一番だ。

気温が下がり、ドンドン寒くなつた。木造船だけに、ストーブは無く、薄い毛布に潜つてゐる。流石に風を引きうるので、魔方陣を作つて枕を温める事に。簡単な呪文と共に枕がホカホカして來た。我ながら仲々の出来だ。ベットの中に仕込んで温めて寝る仕度をする。塩茹でのポテトスープと石のようなパン。親父のパンは今朝全部食べてしまつた。頑張つて流し込んで、夕食が終了、後2日の辛抱だ。風が良いので少し早く着くらしい。家のキャベツだらけのスープとパンが懐かしいなど考えながら、ベットに入った。真夜中搖すられて目が覚めた。女の口が悲惨な顔をして立つてゐる。寝ぼけていた僕は悲鳴を上げそうに成つたが、寸前で回避。だつて暗がりで顔を覗かれていたら誰でもビビるよ。手振りと片言の説明で、寝床から溢れたらしい。確かに三人で寝るには狭すぎて、あのババアは太つて了一で一人でもキツイだろう。でも僕が犠牲になる理由にはならない。ぼくはオバさんを起こす様に女の口に伝えると、横になつた。しばらく話し声がしてまた起こされた。いい加減頭に来ていたので、不機嫌な声と共に首を向けた。「悪いね、その子寝かしておくれよね?あたしのとこじや狭くてさ。寝酒に上等な酒をあげるから。」オバさんが枕下から瓶を取り出した。お袋からもえり物は貰つておきなさい。その後の事はよく考えてから。の教えに従い、何も言わずに受け取つた。オバさんは毛布を被ると寝てしまつた。いや、寝たふりかも。これだけ寒いとウトウトするだけで眠れないだろう。枕を足元にいれて女の口の枕を頭に入れ再び横になつ

た。女の口は枕がホカホカして来たのでビックリしていたが、やがて寝息を立てた。困った。今度僕が眠れない。手を動かしたいのだが、モソモソすると触つてしまつ。結局朝になつてしまつた。今夜は遠慮しない。と心に誓いもしかしたらあんな事もこんな事もなどと想像しながら歯を磨いていると、「楽しそうだね。何かあつた?」昨日の軍人さんだつた。今日は帽子をかぶつて無くて、長い金髪を後ろに束ねている。「同居人をどうやつて懲らしめようかと考えていたんだ。」「余程ひどい奴か?」「ああ、僕の未熟さに漬け込んで来る。」相手は、大きな?を浮かべている。僕は気にしないで朝食を取りに行つた。「困った事があつた相談に来いよ。」背中に声が飛ぶのを手を上げて答える。相談する気は無いが断る事も無い。昼寝でもしようと考えた。

## 友達かな？

部屋に帰ると、まだみんな寝ていた。魔法で起床ラッパでもと考えたが、寝るトラを起こす様なもので、やめておいた。ロッカーを開け中に入つた本を取り出して、ベットで読む事にする。相変わらず女のコが寝ていたが気にしない事にした。出て行つて貰つても気まずい雰囲気になりそうだし。

目が疲れて、少しウトウトした時水夫が「到着は明日の午後だ、準備しておいてくれ。」と言いに来たので、とても嬉しかつた。寒いので甲板に上がるで無く、またウトウトするまで本を読んで過ごした。夕食を取り、寝る仕度をして居ると、あの士官が訪ねて來た。「仲々寝心地良さそうじやないか？お邪魔じや無ければ、明日の相談したいんだけど。」チョット顔が怖い。なんか気に障る事した？トボトボ付いて甲板に出た。「明日、地方議会所に行くよね、良ければ一緒に行かないか？」命令書の予定日より早く着いたので、街など散策したかったのだけど。「うーん、いいよ。でも僕の荷物多いよ。乗り切る？」軍人さんはニッコリ笑つた。大丈夫、もう一台呼べば済む事さ。あと名前言つて無かつたね、アンだ。」「ぼくはミハエル。」「君のベットに居たの、なに？」僕は事情を説明した。「寝心地良いだろなんて冷やかしゴメンだよ。寝返りも出来なくて困つてるんだ。」「君が墮落した貴族の末っ子じや無かつた訳だ。」クスクスと笑いながら答えた。「貧乏人の伴だと言つたはずだよ。」「みんな身分隠す時は、そーゆー理屈で来るのさ。そう言えど、助手は居ないのか？魔法薬を作るのは大変だろう。」確かに長時間鍋で煮詰めたり、色々な薬草を混ぜたりと大変だつた。「代々医者とか魔法使いじや無いから金が無い。少しずつ貯めないと。それに最低限の保証が地方政府から出る。」アンは上を向いた。こいつは自分の身分と立場が余りにも高くなりすぎ、麻痺してしまつていて。しかも、魔法薬を練成出来る人物は地方に居ない、皆すがりついて

来るだらう。」分かつた。僕が助手を探してやる。」「本当？有難う。あゝそつだいい酒貰つたんだ。寝酒にどつ？今日は冷えるから丁度いいと思うよ。トコロで何で薬を練成出来ると思つたんだ？」

「君のベットの本さ！」

部屋に帰ると、枕下から瓶を取り出した。「これさ。貰つたんだけどね、」アンが僕のベットで寝ている女の口に話しかけ少し会話をして此方を向いた。「可哀想に、親に売られたんだ。この後の運命は君にも分かるだろ？」「ああ、ダントンタウンじや珍しくも無いよ。僕らにはどうし様も無いよ。」アンは寝ているオバサンを起こした。「この娘さん譲つて欲しい。」僕のベットで寝ている女の口を指差した。「金貨50で良いよ。」「15枚だ。この子の親に金貨3枚渡した。」今までの送り貰こみだ。」「フン、國の犬が、吠えんじやないよ。今から稼いでくれるのに、そんな安値じやダメだね。」アンの眼の色が不意に変わりオバサンの喉がグウと鳴り始めた。「此処に魔法使いが、二人いる。お前さんが死んでも病死扱いさ。」オバサンは手を上げて答え、アンは術を解いた。「いいよ、好きにしな。」魔法の足輪を外す鍵を投げると代金を受け取つた。「この子は忘れな。仕返し様なんて考えない事だ。水は冷たいよ」アンは薄ら寒い笑みを浮かべて、オバサンの肩を叩いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2274ba/>

---

貧乏性な魔法使い

2012年1月10日20時49分発行